

此兩岸を繞り、其の間點するに白帆を以てす。二三町にして河岸に達すれば、對岸に一山高く横はり、その背後に連山の打重るを見る、構圖稍西白し、直ちに三脚を据ゆ、見物人の語るを聞けば、彼の中景の一山は歴史に名高き天王なりとや、予は誠に嬉しかりき、かゝる名山も予が有となると思へば。茲に約二時間を費し、直前なる御幸橋を渡りて、來たりし方を顧みし處思掛けなくも面白き位置を得たれば、箱を開きて一枚を描く。是より尙進みしも、得る處なく即ち引返へして、再び御幸橋を渡る。此半途に於て又一枚を得、それより、一先づ八幡宮に詣でんと、山を登りしに坂路急にして、その苦しみ甚し漸く境内に達し禮拜して直ちに紅葉を寫し、進みて、鐵橋の畫を一枚描く。

漸く短かき秋の夕日は西山に春づき、輝きし稻田は、今は早や暮靄に包まれんとしてかすかに揺らぎ、殘光高く天王山の頂を赤く染めなして居た。

嬉しかった憎くかった、嬉しか

った美味かつた、

益井生

「蟬」の聲耳に響鳴り、手足百斤の鼎を持ちしより重く、綿の如く疲れし體を横たへ雜誌枕に大の字の晝寢平素胸に描く先生と共にスケツチに餘念なく夏を忘れて浮ぶ江山、風を送り來る白帆眞帆、豈夕顔棚の下納涼のみならんやと正に之れ玉夢の眞

最中憎くや覺ます郵便の聲、『みづゑ』と聞きて勇み起き早く見る、原色版石川さんの裏町、大下先生の山村の夏其他我意を得たりと悦び嬉び時のうつるを知らず、時に行水に汗を流し夕餉を取る、何だか今夕に限り非常に美味にて夢中に濟まし焦るゝ『みづゑ』を手にして淋しき獨身生活を慰めらるゝ諸先生を心より謝したのである、而して夢を覺せし憎き配達夫を愛したのである。

### 片々録

鎌倉 堀谷ワットマン

或る日田舎の淋しき村を例の道具を肩に懸け三脚を持つて、スケツチンググラウンドを探さんと思ひ、左右を見乍ら歩いた時、其邊に遊んで居る四五人の童は、僕を指し、連發して館屋が來たと云ふ、他の一人の兒は三脚を見て、春チャン犬殺しだと云ふた、あめやと呼ばれたは未だ良いが犬殺しには實に閉口した。